

まで計二五回行われている。以下、事例研究として修養団第二回沖縄遺骨収集について考察する。第二回は、ひめゆり部隊の最期の生存者自決の「荒垣海岸」を中心とする収集であった。ネム・ハイビスカス、ガジュマル、ハマユウ、ブーゲンビリアなど、本州では冬を越せない草木が、現地では年間を通じて温暖なため低木に育っている。そのような中、作業を開始した。当初、小さな骨が見つかった。子供の足の骨と思われる。そうしてしばらくした時のことである。頭蓋骨の脳天部を私が収集した。そして高橋氏（茨城県在住）が珊瑚礁の岩に突き刺さっている顔の下半分を収集した。われわれと同時期、別途、遺骨収集を実施していた金光教沖縄支部戦没者遺骨収集団の人々と、国立沖縄戦没者墓苑納骨堂で出会った。金光教沖縄支部は昭和五二年より沖縄遺骨収集を実施している。国立戦没者墓苑には約一八万柱の遺骨が安置され慰霊されている。この納骨堂は、昭和五四年に建てられたもので、赤い琉球瓦で葺かれた参拝施設と沖縄の石で積み上げられた納骨堂から成る。修養団は、財団法人であって、各種の参加者がある。糸満市の長谷寺住職も平成二二年から毎年参加されている。地元の方や修養団所属の人ばかりでなく、沖縄県護国神社、広島県護国神社、大分県護国神社、京都産業大学、皇學館大学なども参加し、糸満の大城藤六氏の指導で遺骨収集を行ってきた。慰霊祭斎主は、沖縄県護国神社祢宜であった。上記初日の遺骨収集を終えた翌朝の収集作業は、二班にわかれて行うこととなった。われわれは、前日と同じ海岸で遺骨収集を行っていたが、第二班は大城氏を中心とする特別班で、そこはかなり危険なところであ

った。潮が満ちてくると戻ることができなくなるといふ喜屋武海岸であった。しばらくして国吉勇という現地の恐らく沖縄での最も多数の遺骨収集をされている人が、軽四輪でわれわれのところへやってきて、その補佐に私が指名された。そのため上記喜屋武海岸に私も向かった。そこで大腿骨と肋骨が岩場で見つかった。丹羽氏という岐阜県在住の人物が、バールで岩を持ち上げ、間から私は砂を除去し、遺骨収集を行った。以上、修養団沖縄遺骨収集を事例研究とする戦没者慰霊に関する一考察である。

シュヴァイツァーにおける生命観の諸問題

岩井謙太郎

本発表においては、まず、遺稿『世界宗教における文化と倫理』でシュヴァイツァーが検討する、世界の諸宗教における世界観の重要な要素が、一元論的思惟（インド的思惟と中国的思惟の理念的類型）と二元論的思惟（キリスト教の理念的類型）によって構成されていることを検討し、その特性を考察する。次いで、彼が、単に諸宗教の理念的類型（一元論的思惟と二元論的思惟）だけでなく、歴史的現象としての諸宗教の錯綜した状況（一元論的思惟における二元論的要素、二元論的思惟における一元論的要素）をも検討していることを考察し、そこから、一元論的思惟と二元論的思惟を相互媒介する共通の視座として「生への畏敬」の世界観（彼独自の生命観）を構想していることを論じる。

一元論的思惟と二元論的思惟（理念的類型）の特性（関係

性)について、要約的に以下に述べる。シュヴァイツァーは、一元論的思惟が、人間が宇宙と相互依存関係に存すること（人間と世界との質的同一性）を重視した点を評価する。ただし、一元論的思惟が、人間を単に自然の一部としてのみ見なす点に彼の批判点が存する。というのも、一元論的思惟は、人間の責任性等の問題を等閑視してしまうからである。それに対して、彼は、二元論的思惟が、人間と世界との質的差異性を前提に、世界を人間によって倫理的に変革すべき対象と見る点を評価する。つまり、人間が現実を変革しうる倫理的視点を確保し、人類に一般的福利をもたらすという点において、彼は二元論的思惟を評価する。ただし、人類の福利のみを追求する二元論的思惟からは、宇宙に対して配慮のない倫理にならざるをえない点を彼は批判する。このように彼は世界観の構成要素（理念的類型）として一元論的思惟と二元論的思惟の特性を検討しているが、歴史的現象としての宗教においては、一元論的思惟と二元論的思惟の両要素が含まれていることを彼は指摘する。すなわち、一方において、キリスト教を、理念的類型的には二元論的思惟に位置づけるが、歴史的現象としてのキリスト教には、一元論的思惟の要素も存し、そして、他方において、インド的思惟、中国的思惟を、理念的類型として、各々一元論的思惟に位置づけるが、歴史的現象としてのインド的思惟、中国的思惟には、二元論的思惟の要素が含まれているとされる。そして、上述の点をふまえ、シュヴァイツァーは、人間と世界との質的差異性（二元論的思惟）と、人間と世界との質的同一性（一元論的思惟）の両者を同時に満たすような倫理を構想する。すなわ

ち、彼は、人間の被造物に対する倫理的態度を問題にする点において二元論的思惟契機（倫理的要素）を有し、それと同時に、倫理の対象を人間以外の被造物（宇宙）にまで拡張する点で、一元論的思惟契機（宇宙的要素）を保持する倫理を構想するのである。そして、このシュヴァイツァーの倫理の構想は、一元論的思惟と二元論的思惟を相互媒介する「生への畏敬」の倫理へと展開されるのである。

以上から、次のことが帰結する。すなわち、シュヴァイツァーは諸宗教の理念的類型（一元論的思惟と二元論的思惟）だけでなく、歴史的現象としての諸宗教の錯綜した状況（一元論的思惟における二元論的要素、二元論的思惟における一元論的要素）をも考察して、一元論的思惟と二元論的思惟を相互媒介する共通の視座として「生への畏敬」の倫理―「生への畏敬」の世界観―を構想したと解釈することができる。換言するならば、彼は、キリスト教に立脚しつつも、キリスト教、インド的思惟、中国的思惟（諸宗教）を相互に補完する形で「生への畏敬」の倫理を構想したと解釈しうるのである。このような諸宗教の相補性から、彼が論じる「生への畏敬」の倫理は、平和問題、環境問題等、現代の倫理的問題をめぐる宗教間対話のための共通の視座を与える可能性を有すると思われる。

人工妊娠中絶をめぐる神学的議論についての一考察

朝香 知己

人工妊娠中絶は、人間の歴史において絶えず行なわれてきたものであり、また時の権威によって実際に禁止／許可されてき